

MiYAGi

まちづくりと 地域支え合い



CONTENTS

大郷町内の森林公園でヤマユリの保存活動を行っている男性に話を聞く、生活支援コーディネーターの千田まさえさん

- 2-3 **まちづくりの今⑫ 大郷町**
全戸訪問で見える「地域と住民」
千田まさえさん（大郷町生活支援コーディネーター）
- 4-5 **コロナ禍に立ち向かうために**
まちづくり短信（拡大版）
6市町的生活支援コーディネーターが情報交換会 ほか
- 6-7 **アドバイザーに聞く地域づくり・回顧と展望**
宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議運営委員会
委員長・大坂純氏 / 委員・真壁さおり氏
- 8 **研修レポート**
地域支援の視点を学ぶ

宮城県内外の
生活支援コーディネーターおよび協議体の
取り組みを発信しながら、
住民や専門職・関係機関の意識を高め、
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける
社会づくりを目指します。

vol.30
2020.9

大郷町

【おおさとちょう】人口7961人、2808世帯(2020年7月末)、高齢化率37.3%(3月末)。町社会福祉協議会が生活支援コーディネーター1人を配置。22行政区を地域づくりの基礎的な単位とし、事実上の日常生活圏域(第2層)とみなす。2019年10月、台風19号災害で町内の211戸が床上・床下浸水などの被害を受けた。応急仮設住宅45戸を整備。入居戸数は34戸(7月末)。みなし仮設住宅は町内外に計19戸(同)。町社協の生活支援相談員1人がコーディネーターとも連携し、被災者支援に当たる。

全戸訪問で見える 「地域と住民」

千田まさえさん



千田まさえさん(自転車で戸別訪問に向かう)

被災者支援で気づいたこと

「住民に私のことを知ってほしい、私は住民の思いや考えを知りたい。それにはやっぱり戸別訪問です」大郷町社会福祉協議会の生活支援コーディネーター、千田まさえさんは、今年度から4か年かけて町の全世帯を3回ずつ訪問する計画を立て、実行中だ。

「アンケート調査では、わからないんです。打ち解けて会話ができるようになって初めて聞けることがあります。だから、1軒のお宅を最低3回は訪問します」

町の世帯数は2800あまり。3回訪問すれば件数は8400を超える。

戸別訪問を始めたきっかけは、昨年10月に町を襲った台風19号に伴う水害の被災者支援。町社協が災害ボランティアセンターを開設し、千田さんも約3か月にわたり最前線で運営を担った。ボランティア派遣やそのニーズ調査で毎日何度も被災者宅に足を運ぶ。仮設住宅やみなし仮設住宅が整備されると、被災者支援を行う生活支援相談員とともに、在宅被災者も含め、訪問活動に従事した。

「被災者支援で気づいたんですよ、戸別訪問で住民と地域の真の姿に近くことができるって。この町に一番いい地域づくりを考えるために、そこから再出発です」

千田さんが町社協に入職したのは2009年。地域巡回型の介護予防サロンの企画運営を長く担当した。職員

のなかでは比較的よく地域を知っているとの評価があり、2017年4月、生活支援コーディネーターに抜擢された。

「自分でもそれなりに住民を知っているつもりでしたが、本当はちっとも知らなかったんです」

サロンを離れば、地域のことはほとんどわからない。自分を知る住民も少ない。

お茶飲みをしている人たちがいると聞きつけ、「私も交せて」と頼んでも、断られることが多かった。

千田さんは、お茶飲みや井戸端会議、隣近所や友人同士の助け合い、ちょっとした声掛けなどを、暮らしやすい地域をつくるための社会資源、すなわち「地域のお宝」と位置付ける。

お宝を取材して広報紙などに事例記事を掲載し、周知に取り組んできた。しかし、お宝の価値や意義が浸透している実感はなかなか持てず、取材も思うように進まない。

そんな状況が戸別訪問で変わる。

「訪問して会話するなかで、伝えたいことを伝え、知りたいことを知ることができるようになってきたんです」

確かな手応えを感じた。お宝も次々見つかる。定期的に開かれる小さな「女子会」、伝統的な「講」を守り続ける人たち、親睦の場となっている納税組合の会合など――「それまで見えなかったものがいっぱい見えてきました」

ある高齢夫婦宅を訪ねたとき、夫に持病があり、妻が将来に不安を感じていることを知った。また、妻は近隣に

わがまちのお宝紹介

【勢見ヶ森古墳公園山百合保存会】
会長の村松富男さん(76歳)が、訪れる人の少ない森林公園を「ヤマユリの名所にしよう」と2019年、一人で会を立ち上げ、町の許可を得て園

内に自生するヤマユリの保護や環境整備を始めた。今年に入り、「三密」を避けられるレクリエーションの場として注目を集め、サロン活動グループや老人クラブが、ヤマユリの鑑賞会などを開催。11月には、町の放課後子ども教室が小学生向け散策会を予定する。ガイドも務める村松さんは、「美しい景色を気軽に楽しんで」と呼びかけている。



何人かの「女子会仲間」を持つていることもわかった。

「この夫婦に限らず、住民には、困ったときは私に連絡してって言ってます。『何かあれば千田さんに言えば何とかなる』くらいに思ってもらえればいい。必要に応じて専門職につないだり、お宝を生かして孤立を防ぐ手立てを考えたりできるでしょう」

自分の存在と役割が地域で知られ、住民との関係が広く、深くなるほど、さまざまな人と場と活動をつなげていく、そう思えるようになってきた。

コロナ禍を逆手に地域づくり

住民には、戸別訪問の目的を「町の資源マップ制作のための取材」と説明している。被災者支援ではない、コーディネーターとしての戸別訪問には、相応の理由が必要だ。そこで「暮らしやすい地域づくりに役立つ資源マップ制作」を名目に掲げた。ここで言う「資源」は、もちろんお宝のこと。一軒一軒訪ね歩き、ようやく見つかる暮らしのなかの小さな集いの場や、何気ない見守り、支え合いなどを指す。「マップ」については、地区ごとのお宝の類例を示す事例集的なものをイメージしている。

実は、千田さんはコーディネーター就任当初から戸別訪問に関心を抱いていた。町社協に入る前の一時期、「ヤクルトレディ」をしていた。販売で訪問すれば、家にいるのは大抵高齢者。お茶飲みと呼ばれることも多かった。仕事ははかどらなくなるが、あえておしゃべりに時間を費やした。その経験もあって、「高齢者の暮らしを知ること」で地域づくりの方向性が見えてくる」と直感したが、戸別訪問の必要性を周囲に理解してもらったための説明や働きかけがうまくできなかった。

自分が「こうしたい」と考えるところは押さえ込み、周囲が期待するであろうコーディネーター像に合わせることにした。

「まずはコーディネーターらしいことをしなきゃと思って」、地域づくりをテーマに識者を招いての講演会や、行政区単位の座談会を開くなどした。

住民が主体的に地域の生活課題を把握し、新たな集いの場や生活支援活動を立ち上げられるよう誘導する試みだったが、徐々に行き詰まっていく。千田さんから支援者が関与を強めると「住民主体」が揺らぎ、弱めれば話し合いは停滞。「まるで迷路をさまようようでした」と振り返る。

そんなとき、台風19号災害が発生。被災者支援が住民へのアプローチを見直す契機となった。

そして今年3月、コロナ禍が押し寄せる。密集・密接・密閉の「三密」を回避しつつ、地域のつながりを切らず、心身の健康増進を図る試行錯誤が続く。地域づくりを考えるうえで、示唆に富む実践も出てきた。

千田さんは、町社協の同僚で介護予防事業を担当する職員とともに、一人の「お宝的人物」に目を付けた。訪れる人がほとんどない里山の森林公園で、ヤマユリの保護と園内の環境整備に取り組む村松富男さんだ(囲み記事参照)。

季節は初夏。ヤマユリが見頃を迎える一方、集会所などのサロンは軒並み休止中。千田さんたちは「運動不足の解消に」と公園散策を勧め、併せて村松さんの活動を紹介するチラシをつくって高齢者らに配布。そのチラシがサロン活動グループの目にとまる。グループは7月半ば、ヤマユリ鑑賞と公園散策という「三密」回避の野外活動としてサロンを再開した。数日後、サロン世話人の一人が、地元老人クラブにこれを報告。すると同月下旬、クラブが公園を会場にウォーキングイベント



訪問先の住民と歓談する千田さん(感染予防に配慮し、玄関先で会話)

トを開いた。いずれも好評を博し、公園の知名度が上昇。秋には町の放課後子ども教室が、小学生向けに公園散策会を行うことが決まっている。

千田さんは、案内チラシや看板の制作、当日運営の補助といった裏方役で一連の動きをサポート。今後は、老人クラブなどの住民団体が、ヤマユリの保護や公園の利活用でさらに村松さんと連携できないか、模索したい考えだ。

ピンチをチャンスに変える千田さん。涌谷町出身で、現在は大崎市古川に夫、娘と暮らす。46歳。モットーは「迷ったときには直感を信じる」。全戸訪問もいとわれない、情熱と粘り強さに裏打ちされた直感は、きっと地域づくりの望ましい方向を指し示すだろう。

利

コロナ禍に立ち向かうために 「知恵と経験わかち合う」 6市町生活支援コーディネーターの情報交換会



まちづくり短信

拡大版

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局
(宮城県社会福祉協議会)
(2020年6～8月期)

2020年7月21日の今年度第1回情報交換会(上段左から小野憲幸さん、眞籠孝史さん、田中隆輔さん、鈴木優さん、中段左から伊藤信子さん、佐藤雅子さん、佐藤亜由美さん、郷右近佑佳さん、下段左から佐久間友香里さん、佐藤正および菊池琴美[県社協])

塩釜、多賀城、東松島の3市と松島、七ヶ浜、利府の3町の生活支援コーディネーターが3か月に1度、一堂に会して自由な話し合いと情報交換の場を持ちます。2017年に始まったこの自主的な交流により、コロナ禍でも随時電話やメールで連絡を取り、地域づくりの方策を相談し合えるコーディネーター同士の連携が育まれました。今年7月21日に東松島市で開かれた今年度第1回情報交換会の出席者に、参加のメリックなどを聞きました。

● 小野憲幸さん

(塩釜市南部・東部地区地域包括支援センター)

「コロナ対応は暗中模索だったが、仲間に電話して各市町の状況を知ることができた。悩みを共有し、情報、知恵、工夫を出し合う。いろんな考え方や実践を知ったうえで、自分がどう動けばいいか判断できる。今後はお互いの協議体への参加や、会として地域づくり先進地の視察なども行えるといい」

● 眞籠孝史さん

(東松島市社会福祉協議会)

「他市町の生活支援コーディネー

ターの動きを知るとは、自分の動きを確認、評価することにつながる。もったいいやり方がある、自分のやり方は間違っていないとか、自分を客観視できる。話し合いや情報共有から生まれた地域づくりのアイデアや実践が、県全体でも共有できるようにしてほしい」

● 田中隆輔さん

(利府町中央地域包括支援センター)

「テーマを設けず何でも話せる場を持つことを目的とし、議事録もつくらない。生活支援コーディネーターが緩やかにつながる場。コーディネーターの孤立防止にもなる。他市町の実践を知り、自分の町と比較したり、応用することも可能。コロナ対応に関しても、電話で気軽に情報交換できた。行政の事業担当者も参加すればいいと思う」

● 鈴木優さん

(七ヶ浜町社会福祉協議会)

「私は現在、町で一人だけの生活支援コーディネーター。他市町の実践を知ることができ、とてもありがたい。取り入れられるものは、積極的に取り入れる。昨年2月に初めて

『お宝発表会』を開催したが、企画と運営の実際を仲間から学ぶことは、発表会を成功に導く鍵だった」

●伊藤信子さん、佐藤雅子さん

(塩釜市西部地域包括支援センター)

「市の生活支援コーディネーター同士でも定期的に連絡会を開いているが、他市町の取り組みを聞ける情報交換会への参加はいい刺激になる」「いつも何かしら気づきがある。自分の活動を振り返り、成果や課題を整理するときにも他市町の情報が役立つ」

●佐藤亜由美さん

(塩釜市北部1地区地域包括支援センター)

「他市町の生活支援コーディネーターが独自の情報媒体を出している」と知り、私も情報紙発行を始めた。今年4月、新型コロナウイルス感染症の感染予防と家でできる体操などの情報を掲載した情報紙を、ほかの職員にも手伝ってもらいながら、担当地区全戸に配布できた」

●郷右近佑佳さん

(塩釜市北部2地区地域包括支援センター)

「地域への入り方、住民との関わり

方などについての悩みを情報交換会で打ち明けると、その場ですぐ仲間たちがアドバイスをしてくれた。協議体の話し合いが停滞したとき、打開する工夫とかも。知恵や経験をわかち合う場になっていく」

●佐久間友香里さん

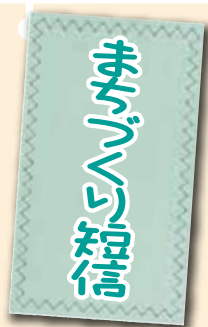
(利府町北部地域包括支援センター)

「生活支援コーディネーターになってまだ2年目の私には、自分の町以外の話を聞ける場は貴重。『お宝発表会』は利府でもできたらしいなど思っていて、ほかの市町の取り組みは参考になる。配付資料のつくり方、住民への働きかけ方など、いろんな学びがある」

●佐藤正、菊池琴美

(宮城県社会福祉協議会)

「生活支援コーディネーターが、悩みなどを一人で抱え込まずに済む」「悩みが生じるのは地域と真剣に向き合うからこそ。悩みの共有も学びと刺激になる」「住民活動は市町の境界にとらわれない。越境的な地域の活動も把握しやすくなる」



今年度の地域づくり方針

(村田町) (6月9日)

生活支援体制整備事業を所管する村田町健康福祉課は今年度、地域包括支援センター(同課内)が開く個別ケア会議に、町社会福祉協議会所属の生活支援コーディネーターを参加させる方向で調整を進めることにしています。これにより専門職間の連携を深め、個別の生活課題から地域課題へと視野を広めたり、専門職が要支援者だけでなく周囲の住民ともつながることで、「地域のお宝」を生かす介護予防プランやケアプランをつくれるとといった効果が期待されます。

生活支援コーディネーターは、お宝の掘り起こしを地域おこし協力隊とも連携中です。協力隊の配置事業は町企画財政課の担当で、一連の動きによって両課と地域包括支援センター、町社協が個別支援や地域支援、地域おこしなどで協力する環境も整いそうです。

試行的に2層協議体

(岩沼市西部地域) (8月26日)

岩沼西地域包括支援センター(以下、西包括)は、高齢でも安心して暮らせる地域づくりなどを話し合う地域ケース会議を開き、地域課題となっているコロナ禍のサロンなど住民活動の場をテーマに、地域の空き家や介護施設等の活用に関する情報の共有と、活動の再開・継続に向けた課題の整理などを行いました。

会議には、西包括の所長や看護師、第2層生活支援コーディネーターのほか、民生委員・児童委員、介護事業所の役員、地域サロンの代表、町社会福祉協議会の第1層生活支援コーディネーター、市の関係職員らが参加。このような住民主体を基盤とする、住民、行政、専門職・機関の協議、協働の場が、地域課題の解決や市が目指す「支え(あい)の地域づくり」に有用であることを確認しました。

西包括は今後も試行的に会議を開催し、将来、小学校区単位の「第2層協議体」と位置付けたい考えです。

生活支援体制整備事業や地域づくり支援に関する
問い合わせ、情報提供はお気軽に事務局まで
電話：022-266-2621
担当：佐藤正、菊池琴美

地域づくりは 住民に学ぶ

大坂純氏

(宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議運営委員長)



仙台市立病院の医療ソーシャルワーカーとして長年勤務したのち、社会福祉法人ありのまま舎理事長、仙台白百合女子大教授などを歴任。現在、東北子ども福祉専門学院副院長を務める。1956年生まれ、仙台市在住。

地域に「交ぜてもらおう」

生活支援体制整備事業（以下、体制整備）がスタートして5年が経過しましたが、この間、私たち支援者が住民の力の大きさをきちんと認識したこと、そのうえで住民とつながって、その力を少しでも強められるのだと確認できたことは、重要な成果だと思います。

住民の力を強めるというのは、生活支援コーディネーターをはじめ介護や福祉の専門職、行政の事業担当者がある「こうあるべき」という型にはめこむことは、根本的に違います。住民が自らの力で、高年齢の望ましい暮らしのあり方に近づいていく、それが体制整備の目的であり、そのお手伝いが私たちの仕事です。

私たち支援者は、住民とつながるときには専門職としてではなく、一人の人間として地域に交ぜてもらって、姿勢が欠かせません。交ぜてもらって、いざというときに専門的な知識や技術で住民活動を助けたいわけではなく、そこで「そう言えばあの人、生活支援コーディネーターだったね」となる、そんな関わり方が理想でしょう。専門職だから、住民だからということ、支援する人・される人と役割が固定されるべきではありません。

住民の力を生かすにはまず地域を知る、住民から学ぶことです。住民から助けてもらうことなく、地域づくりを一方的に支援することなどありません。住民の力とアイデア、行動力、すなわち「地域のお宝」ですが、そこから学ぶことは本当に多いのです。

「逃げない」覚悟を示す

「お宝を見つけて、次に何を？」と聞く生活支援コーディネーターがいますが、私は逆に「あなたは地域住民から信頼されるようになったんですか」と聞きたい。お宝探しの過程で信頼を得る関わり方ができれば、次に何をすべきかは住民から教わることができるのです。

信頼を得るのに必要な姿勢の一つに、住民に対して「逃げない」覚悟を示すことがあります。逃げないというのは、まず徹底的に話を聞くこと。そして、こちらの都合ではなく住民のペースや地域の事情に合わせるということです。

コロナ禍をどう乗り越えるかについても、地域で何ができなくなり、何が続けられているかをまず知ることです。解決策は必ず地域にあります。社会福祉協議会の生活支援コーディネーターが、生活福祉資金の貸し付け業務の手伝いで忙しいといった話もあります。貸し付け窓口でもコーディネーターならではの視点で話を聞くことです。状況が落ち着いたあとその経験が必ず役立ちます。大規模災害で被災者支援を行うようなときも同じことが言えます。

今年度、私たちアドバイザーや県、県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局（県社協）がチームを組んで体制整備の「市町村伴走型支援モデル事業」を実施します。栗原市、美里町、南三陸町の1市2町が対象です。「逃げない」覚悟でお手伝いします。行政の事業担当にも、事業の受託者にも、住民にも、楽しさを体感できるように成果を残すのが目標。楽しい・面白いのは地域の力を引き出す必須の要素です。

縦割り乗り越え 連携を

真壁さおり氏

(宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議運営委員)



NPO法人せんだいみやぎNPOセンター職員などを経て現在、宮城県サポートセンター支援事務所コーディネーター、認定NPO法人地星社副代表理事、認定NPO法人社の伝言板ゆるる理事。社会福祉士。1973年生まれ、仙台市在住。

被災者支援と体制整備

東日本大震災の被災者支援に関して、宮城県内では4、5年前から「個別支援から地域支援、地域づくりへ」が合い言葉になりました。災害公営住宅の整備や防災集団移転が進み、コミュニティの再構築が重要な課題になってきたこと、生活支援体制整備事業（以下、体制整備）が始まったことなどが背景にあります。地域づくりへの流れについては、行政や社会福祉協議会、各種支援団体の共通認識として揺るぎないものになっています。

そこで本来は、被災者支援と体制整備の協働や融合が図られ、被災地を暮らしやすい地域としていく取り組みや、そのノウハウを内陸部へ波及させていくといったことが期待されます。

現状は、必ずしもそうなっていません。二つの流れが組み合わさって大きな一つの流れになるのではなく、むしろ別々になっていることのほうが多いように思われます。たとえば、被災者支援の枠組みで行われる地域づくりの話し合いの場と、体制整備の協議体が別になっている。同じようなテーマ、似たような顔ぶれなのに、話し合いの枠組みが違う。これでは、被災者支援の経験を一般の地域づくりへ広げていったり、縦割りを乗り越えたりする具体的な方法論を確立しにくいでしょう。

宮城県サポートセンター支援事務所での私の仕事も、従来の被災者支援拠点の運営支援から、住民やNPO、社協、行政などが地域づくりで連携するための

話し合いの場づくり支援へと移ってきています。

粘り強くすり合わせを

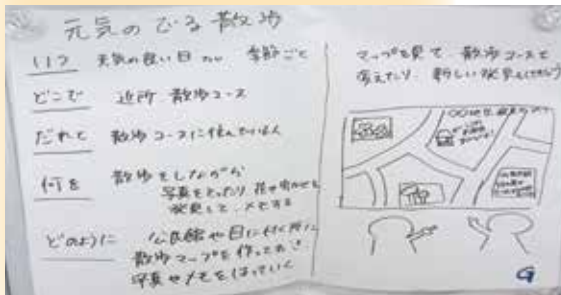
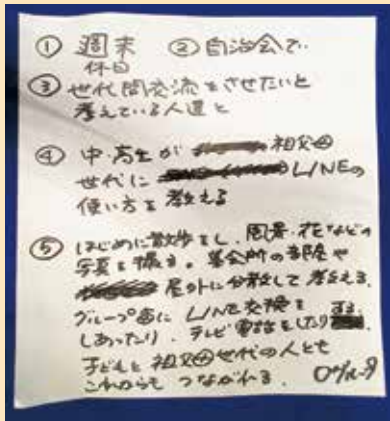
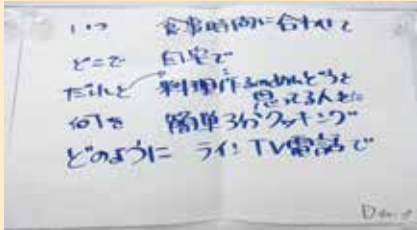
地域づくりの鍵は、住民の力をいかに引き出すかにあります。その意味で、南三陸町社会福祉協議会の取り組みのいくつかは、参考になります。町社協はかつて、被災者支援を行う生活支援相談員を延べ212人、仮設住宅入居者が見守りに当たる滞在型支援員を延べ139人採用しました。支援員経験者のなかには、現在、自由な時間に近隣のちよつとした困りごとの手助けや見守りを無償で行う町社協の登録ボランティア制度「ほっとバンク」で活躍する人が少なくありません。地域生活支援の担い手となることは、自身の生きがいづくりや介護予防にも役立つようです。町社協はこうした仕組みをつくるために積極的に住民と対話してきました。住民の力を借りるのがとても上手。支援者として関わるというより、むしろ住民に助けをもらう立場で地域へ飛び込んでいきます。

こうした取り組みをさらに広げていくには、住民、社協、行政のほか地域包括支援センターや地域づくりNPOなど各種支援団体が、組織内でも対外的にも、事業の枠組みを超えて連携しないといけません。

そこでも重要なのは話し合いです。「言ってもわからない」みたいな諦めや組織間のしがらみもあって、なかなか対話が進まないこともあります。そんなときこそ私たちのような外部の人間を上手に使ってほしい。「地域づくりへ」という大きな共通認識はできています。あとは現場の活動に落とし込む方法や実践のあり方について、粘り強くお互いの考えをすり合わせていけばいいのです。

地域支援の視点を学ぶ

コロナ禍での活動プログラムづくり



宮城県生活支援コーディネーター養成研修において、地域福祉コーディネーター基礎実践研修受講のための「事前研修1・2」が、7月末から8月にかけて仙台・登米の両会場で開催されました。講師に、兵庫県社会福祉協議会地域福祉部の永坂美晴さんと、淡路市社会福祉協議会事務局次長の岩城和志さんを招き、感染対策を施したうえで、生活支援コーディネーターや同僚、民生委員・児童委員、地域活動者など計66人が受講し、地域支援への理解を深めました。

研修1日目は、事例をとおして自分以外の意見や価値観の多様性を知り、住民の気持ちに寄り添う意味や、地域をつなぎなおし新たなつながりを見つける視点を学びました。続く2日目は、「コロナ禍で何の習慣に支障が出たのか?」「どうして、コロナ禍でも地域住民の見守りや支え合いが必要なのか?」という演習を実施。本人・周囲の住民・専門職という3つの立場になりきって、3者の視点だけで考えるものではないことを認識しました。また、自分が元気になれるものを書き出し、そのなかからコロナ禍での活動に活かせるものを選んで企画する演習を行い、活発で前向きな意見交換が行われました。

文え合い川柳 (かこ内はペンネーム)

本人部門

助けての 声も出せずに ただひとり (テビンオコスナ)

さみしいな 涙のような つゆの雨 (あまやどりのタカ)

孤独感 打ち勝つための 立ち話 (いとしのエリカ)

さみしいと 大声出したら 怒られた (服茶屋)

住民部門

お隣の あかり灯らず こんばんは (高倉健三)

静けさに 楽しみ日々を 思い出す (追)

シルバーカー 一歩も動かず さびついた キャサリンズ

なにげない いつもの顔ぶれ たからもの (ぼやぼや)

専門職部門

広げよう 元祖三密 みんなの輪 (八密大好き黄熊)

住民に 寄り添って知る 真の愛 (いとしのエリカ)

SOS 知りたい 聞きたい 伝えたい (3丁目の天使)

コロナ禍も 長雨の中も 平常心 (あまやどりのタカ)

やった気に なるのはいつも 専門職 (えだまめさん)

住民の 情報力には かなわない (追)